2024 年度**「マツダ財団 青少年健全育成関係 成果報告会」**を開催しました

2024 年度の研究者と市民活動団体合同による成果報告会を、2025 年 2 月 16 日（日）に、広島 YMCA 国際文化センターコンベンションホール（広島市中区）において開催しました。

この報告会は、研究と実践の融合、広島県と山口県の市民活動団体の交流を目的として、研究助成と市民活動支援の終了者の皆さまにお集まりいただき 2019 年度から開催しているものです。今年度から、新たに若者を支援する事業「若者×ツナグバ」*1 の終了団体にも参加していただいた他、2013 年度に開始し今年度で終了するＮＰＯ法人ピピオ子どもセンターとの連携事業「スタートラインプロジェクト」の関係者の皆さまにもご参加いただき、総勢 83 名*2 参加の下、開催しました。

＜プログラム＞
＊基調講演
＊スタートラインプロジェクト報告
＊研究内容・市民活動・若者×ツナグバ
　紹介＆ポスターセッション
＊パネルディスカッション

*1 若者一人ひとりが、自分の納得する生き方を見つけ、能力を高め、選択肢を増やし、希望につなげていくことを支援する事業

*2　研究者 6 名（全国 5 大学）、市民団体 57 名（広島県 19 団体、山口県 8 団体）、若者×ツナグバ 3 名（2 団体）、スタートラインプロジェクト 3 名、一般参加者、選考委員 等。

プログラムの一つ目は、選考委員の千葉大学名誉教授・千葉敬愛短期大学名誉教授の明石要一先生による、毎年恒例の基調講演で、「幼保小の架け橋を推進する方策」と題し、お話しいただきました。今の幼児が抱える 10 の課題（ままごと遊びでは、夕飯の食生活の変化により調理よりも配膳遊びが増えてきていること、背筋の力が弱くなって机にうつむ

く姿勢の悪い小学生が増えていること、握力が弱くなり雑巾が絞れない子が増えていること、箸を使う機会が減りうまく持てない子や鉛筆の持ち方がうまくできず筆圧が弱ってきていることなど）が紹介されました。続いて、そういった課題がある現代の子どもの育成に対し、幼稚園・保育園、小学校の架け橋をどのように推進していくかについて紹介されました。箸の持ち方指導から鉛筆の持ち方指導の結びつきを考えることや、2歳児まではデジタルより紙媒体が良いこと、小学校では「読み」と「書き」では、「読み」が先の方が良いこと、また、幼児期には、遊びのようなわくわくする経験を通じて、生きた知識を育成するために、「わからない」「なぜ」を発する保育者と幼児の関係を作ることなどが紹介され、皆さん、うなずいたり、メモをとったりと熱心に聴き入っておられました。また、そういった背景のある小学生とどのように接するか考えるきっかけをいただいたように思いました。

次に、今年度終了する事業「スタートラインプロジェクト」について、協働先である特定非営利活動法人ピピオこどもセンター理事（弁護士）の平谷優子先生から活動の概要を、広島国際大学教授 岡本晴美先生から、活動の経緯や活動概要、当プロジェクトの意義と成果について、当事者である子どもたちの声も交えてご報告いただきました。ポスターセッションにもご参加いただき、プロジェクト活動に共感された市民団体の方と交流されていました。

　続いて、今年度研究や活動を終了される皆さまの研究や活動内容の紹介とポスターセッションを3グループに分けて行い、参加者全員で交流を深めていただきました。

C 1
enjoy spielplatz
広島女学院大学
B 4
A 4
C 3
B 3
A 3
「うつくしの杜」子ども食堂
ひとあそび。
NOUSAI

プログラムの最後は、パネルデスカッション。浜松医科大学 准教授 山本真実先生にファシリテーターを担っていただき、「地域における居場所と今後の展望」をテーマに、居場所づくりの活動をされている３名のパネリストの皆さまにデスカッションしていただきました。山本先生や会場の方から、「活動に取り組む際に大切にしていること、これだけは譲れないことは？」「団体が思う方向に物事が進まないことや、それを乗り越えるための工夫は？」「傾聴は難しいがどのようにされているか？」「対話を大切にされているが、子どもたちの衝突や意見のくい違い、もやもや感などにどのように向き合っているか？」「活動する中でこれまで感動した事例は？」など市民団体の皆さまが日ごろ疑問に思っておられることや苦労されていることや活動の意義などについて、三者三様の考え方や取り組み事例が紹介され、今後の活動のヒントをいただくことができました。

＊＊＊ 主なコメント ＊＊＊

・お互いを認めることが大事。
・同じ目線で話をする。
・保護者とも連携し情報共有する。
・保護者の思いも、子どもの思いもフラットな気持ち（自分の価値感は横に置き客観的、感情的にならず）で聴くようにする。
・大人が一番難しいと感じることがあるので、対話することが大事。
・子どもができないことや苦手なことを励ましやらせるのではなく、できることを応援する。子どもたちが自ら取り組むことに口出しせず子どもに任せる（放任ではなく）。すると、
自分たちでルールを作ったり、役割分担したりしてやり遂げる様子を見て感動した。

右から、ファシリテーターの山本先生、パネリストの柴田みつ恵様、垰下陽様、村上忍様

続いて、選考委員の先生方から、本日の講評をいただきました。団体と活動の更なる発展に向けて、大きなヒントとともに背中を押していただきました。

＊＊＊＊＊　先生方のコメント　＊＊＊＊＊

・それぞれの活動は素晴らしく、それが周囲の人たちにしか届いていないのはもったいない。是非、マツダ財団をはじめ、取りまとめているポータルサイトなどに情報提供し、多くの人に認知いただき、広がっていくことを期待している。

・皆さまの活動が継続発展されることを期待している。この成果報告会は face to face でつながれる機会なので、更に成功事例や難しかったこと、できなかったことなど共有しあうことができると良い。

・活動をする際に、企画して実施されると思うが、活動の成果はどうだったかもチェックし、多面的に検証し次回の活動につなげると良い。そして、5 年、10 年、20 年と継続していただきたい。チェックの際の視点は 2 つ。①用いた方法そのものの効果があり子どもたちが変容したのか、②方法よりも指導した人の熱意が子どもたちに伝わり変容したのか（=熱意効果）。客観的、冷静に毎回実施中に子供たちの様子がどうか、どのような言葉で何を語っているのか、行動はどうかといった点を継続的にチェックフォローする。そして、その中から新たな課題を設定し年を追うごとにバージョンアップしていけると良い。さらなる発展に期待している。

・学校教育は「読む力」と「書く力」。社会教育は「話す力」と「聴く力」を養う。今のお子さんは、聴く力と話す力が弱いので、市民団体の皆さまのお力をお借りしたい。

・助成金応募の際の継続申請の場合は、前回の振り返りと応募にあたっての変更点（新規、改善）を明示していただくと良い。

このたびの、4 時間にわたって開催した成果報告会、参加者皆さまの当日の様子やアンケート結果から所期の目的である、研究と実践の融合、地域同士をつなぐ役割を果たせたのではないかと感じました。今年度終了の皆様、大変お疲れ様でした。ありがとうございました。

これからも、マツダ財団は、研究者の皆さま、市民団体の皆さまと共に緩やかな繋がりを持ち、青少年健全育成を通して地域を盛り上げて参りたいと考えています。

尚、当日の様子がわかる動画を YouTube にて公開していますので、是非ご覧ください。
https://youtu.be/RIs0v3HGmmc

（本郷）